

# PBL

Project-Based Learning

## 推進支援センター通信

VOL. 7



同志社大学では、2006年度に現代GPで採択された「公募制のプロジェクト科目による地域活性化～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して～」の取り組みの一環として、『3つのC(Community, Communication, Collaboration)』をサポートし、PBLを円滑に支援するコミュニケーションシステムとして、SNS(Social Networking Service)をベースに、2005年度にCNS(Community Networking Service)を構想、2007年度から独自に株式会社SIGELと共同開発を進め、2008年4月よりPBLを基本とする授業科目「プロジェクト科目」での利用を開始しました。

今回はPBL型学習において、もはや欠かすことのできないツールであるCNSについて特集いたします。

## CNSは何のために開発されたのか？

プロジェクト科目検討部会長 PBL推進支援センター長  
文学部教授 山田和人

CNSはCommunity Networking Serviceの頭文字をとって、名づけられた。CNSは、同志社大学プロジェクト科目と株式会社SIGELが共同開発したPBLを念頭に置く学修支援ツールとして構想された。まずは、PBLに必要なものは何なのか、PBLの学修支援とは何なのか、という問いかけから始まった。そうした議論の過程でさまざまな課題が浮き彫りになっていった。最も大きかったのは、PBLの構造をモデル化して、それに見合うシステムを構築することだった。実践を通して、プロジェクトがプロジェクト遂行プロセスとコミュニティ形成プロセスの重層構造を持っていることに気づいた。

従来のPBLの考え方では、プロジェクトをいかに推進していくかが学修支援の目的ととらえられがちだったが、実は、プロジェクトを支えるコミュニティ形成のプロセスとの往還構造によって、プロジェクトが推進されていくことがわかってきた。そこで、プロジェクトのバックグラウンドとして動いているチームを支援するためには、メンバーによるコミュニティ形成を支援するツールが必要ではないかと考えた。具体的に言えば、コミュニティが仲間のコミュニティから学びのコミュニティ、さらに目的を共有したチームのコミュニティへと深化していくなかで、プ

ロジェクトのアウトプットの質的な向上が起こってくるのが明らかになってきた。

CNSの本来の目的は、こうしたコミュニティ形成支援にあった。その意味で、もっとも重要な機能は、チームと個人の活動記録にあり、それを共有することで、プロジェクトの推進とコミュニティの形成を一体のものとして可視化することであった。広い意味でのポートフォリオ機能がメンバー間の信頼と相互扶助を育む。CNSのチームと個人の活動記録をプロジェクトの共有財産として蓄積し、それをもとに対話することによってプロジェクトの迷走を防止することもできる。

その意味で、CNSのCは、Communicationではなく、Communityを指す。スマホの普及にともない、コミュニケーション・ツールには便利なものが増えてきており、そうしたニューメディアを積極的に活用してコミュニケーションをとってもらえばいい。ただ、CNSは、コミュニティの輪を拡げていくのではなく、コミュニティをより強い絆で結ばれた相互扶助・相互批判の場とするために開発されたPBLの学修支援ツールである。その意味で、データバンクと、チームと個人の活動記録を活用して、チームの学びのコミュニティを深化させてほしい。

注)ポートフォリオは元来紙ばさみであり、あらゆる情報を記録し保存しておくツールである。プロジェクト科目では、学習履歴の蓄積ということになる。チームのポートフォリオとしては、議事録、報告書、企画書、連絡文書などがある。また、個人のポートフォリオとしては、活動記録があり、ここに自分自身のプロジェクトに関わるタスクを日誌として書くことで、自分自身の活動を振り返るための資料として使うことができる。これらにメンバー同士のコメントがつけば、強靱なプロジェクト推進ツールにもなる。

## 卒業生からのメッセージ

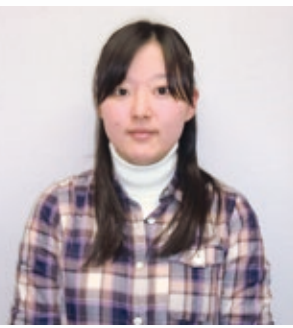
杉田 紫野 さん

【プロフィール】  
2006年度プロジェクト科目「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」受講生。  
2008年3月に同志社大学法学部を卒業し、現在、同志社大学 国際連携推進機構 国際センター 国際課に勤務している。

積極的な学生だったと思われがちですが、初回の授業ではサブリーダーの役割ですら他のメンバーに譲るほど、人を巻き込むことからは程遠い学生でした。その後リーダーの辞退によりやむを得ず後任を務めることになり、全てが手探りで始まりました。

子供は好きで、伝統芸能にも興味はある。ただし「能」は一度も観たことがない。メンバーの中では最も知識も技術もない状態で、最初はメンバーの話聞くばかりでしたが、「リーダーは誰よりも勉強しなさい。信頼は後からついてくる」という科目担当者の言葉を信じ、誰よりもプロジェクトに時間をかけようと決めました。時には弱気になりながらも1年間やり抜くことができたのは、メンバーの支えがあってこそ、チームとしてお互いをフォローし合えたからこそだったと思います。

職員への憧れも、プロジェクト科目を運営する教職員の「チーム」への憧れから来ているのかもしれない。苦勞の絶えない1年でしたが、本気で悩み、考えることができたのは、その先にある「学び」の存在を、学生以上に信じている教職員の存在があったからでした。このチームの存在こそが、本学のプロジェクト科目の魅力だと思います。



この場をつくる側に立ちたい

成果報告会でそう感じたことが、大学職員になったきっかけでした。入社後は国際課に配属されましたが、いつか職員としてプロジェクト科目に関わりたいという気持ちは、今も変わっていません。

プロジェクト科目では、チームでの成果が求められます。一人で全てを担う必要はない—そのことがむしろ学生の力を引き出し、また全ての学生に成長のチャンスを与えるのだと思います。

私自身は3年次生の時に、「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」というテーマの科目で、リーダーを務めました。もともと

## 山田センター長のつぶやき

同志社大学PBL推進支援センターの山田和人センター長によるコーナーです。



社会にメッセージを届ける「問いかけ力」をいつの間にか身につけていた。いつからか、自分も変わった。これが僕のPBL元年であった。

はく自身がPBLに興味を持ち、実践するようになったきっかけは、大学教育に対する不信からだった。大学で教えるとはどういうことなのか、自分の持っている知識やスキルを教授するだけなのか、自分はそんな悩みを抱えているが、学生は必ずしもそんな教師の悩みなど知るよしもない。そんななかでいささか学生不信にも陥っていった。この事態を何とか変えたいと思い、国文学科の特殊講義の一コマを全学部で履修できるようにしてもらった。それは、滋賀県の大津祭を調査・取材して、ホームページを作成し、その文化的価値を配信するという授業だった。当時はまだホームページも初期段階だったが、aviファイルで動画を見ることができるサイトに仕上がった。経済学部や英文学科、国文学科などの多様な学生が履修していた。かれらは自ら考え行動していった。そして、現地調査を行い、コンテンツを作成し、夏休みもhtml講習を受け、見事にアカデミックでポップなサイトを立ち上げた。この体験を通して、学生たちは自律的に学習し、地域と連携し、

## PBL推進協議会開催のお知らせ

PBL推進協議会はPBL教育に関する各大学・教育関連機関の先進的な取組事例報告をもとに情報交換を行いながら、効果的な授業運営や成績評価のあり方を研究し、現場の授業運営に応用・実践していくことを目的とした研究会です。会費不要、申し込み制です。参加ご希望の方はPBL推進支援センター事務局までご連絡をお願いします。

■2012年度 第2回 PBL推進協議会

講師：京都造形芸術大学 副学長 大野木 啓人 芸術学部教授

日時：2013年3月2日(土) 13:30～15:30

会場：同志社大学 今出川キャンパス 寧静館会議室

## プロジェクト科目とは？

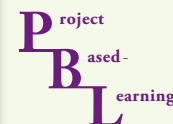
2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、受講生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。

【問合せ先】

同志社大学PBL推進支援センター  
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 教務課内  
Tel: 075-251-4630 Fax: 075-251-3064  
E-mail: ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

【ホームページ】

http://ppsc.doshisha.ac.jp/  
http://pbs.doshisha.ac.jp/





プロジェクト科目において、2012年度春学期成果報告会にてCNS賞を受賞したプロジェクトのCNS活用事例および、共同開発者である株式会社SIGELより、CNS開発の狙いと今後の可能性についてご紹介いたします。

## CNSを利用して



2012年度プロジェクト科目  
「子供の成長に良い玩具の  
考察と企画」  
CNS担当

文化情報学部  
文化情報学科 3年次生  
大平 恵 さん

“共有”と“交換”の場として、私たちのプロジェクトではCNSを活用しました。

まずは、データ・情報の“共有”の場としてのCNS。  
子供の成長に良いことを探るため、各自が論文や本を読み、それをまとめたレポートをデータバンクにアップしました。これにより、各自が限られた時間の中で沢山の論文に触れ、考察することができました。

次に、おもち情報・意見“交換”の場としてのCNS。  
私たちのプロジェクトは、「女児ホビー班」「知育玩具班」「エコ玩具班」「iPhone・雑貨班」の4つにテーマを絞り、班に分かれて企画を行っていました。そこで、「おもちちゃんについての情報、意見交換」を目的とした、班ごとのスレッドを作成し使用しました。書き込みを、班のメンバーに限らず、プロジェクトメンバー全員を対象にしたことで、他分野の意見も企画に取り入れることができ、様々な角度から物事を捉えることができました。

このような使い方をしたCNSは、私たちプロジェクトのアルバムのような存在です。

一つだけ残念なことは、私たちが大学を卒業してしまうと、CNSにアクセスできなくなるということです。大学生の私たちが奮闘したこの経験を、卒業してからもCNSを通して振り返ることができれば、より魅力的なツールになると思いました。



## CNS開発の狙いと、今後の可能性について



〈学生ログイン時のCNSトップページ(サンプル)〉

株式会社  
SIGEL  
http://www.sigel.co.jp

弊社は会社設立以来、大学などの教育機関に特化し、「ITコンサルジェ」をキーワードにした「お困りごと」の解決を目指して、システム提案から開発、導入、運用までのご支援をさせて頂いております。そのような中、CNSは2007年に同志社大学様との共同開発にて生まれました。

CNSは、プロジェクト科目関係者の時間・場所を問わないコミュニケーションと学修履歴の記録を通じ、協働学修と科目間の学修における気付きを実現させることが目的でした。

各自の体験活動報告や作成資料が他メンバーからのコメントを通じて内容がブラッシュアップされる活用がなされており、CNSは単なるコミュニケーションツールにとどまらず、情報共有と意見交換による学生の学びを強化していく仕組みであると実感しております。

現在の世の中は、LINE、Twitterなど様々なサービスが公開されるはじめており、また、スマートフォンなどの普及によるアクセス端末の多様化もあり、CNSに求められる役割・機能は開発当初から変化していると考えます。

弊社としては、この流れを踏まえつつ、引続き教員、学生目線に立ったご提案をさせて頂き、今後もプロジェクト科目の取組みを強力にご支援できる様尽力する所存です。



〈PBL教育フォーラム2012 総会司会の様子〉  
(下記参照)

## ◆2012年12月17日(月) 第2回プロジェクト・リテラシー講習会

2012年度第2回のプロジェクト・リテラシー講習会が両校地で開催されました。秋学期成果報告会(1/20)に向けたプレゼンテーション講習会として、プロのデザイナーによる講演とワークショップが行われました。テーマをつくる・キーワードを提示する・ポイントを繰り返す・聴衆に問いかける・共感を引き出すなど、プロが実践する具体的なプレゼンテーション技術のレクチャーが行われた後、参加者は4名ごとのチームに別れて、100円均一ショップの商品(ちりとり、窓拭き、ふとん圧縮袋、エコふきん等)の魅力を伝えるプレゼンに挑戦しました。3枚の画用紙を両面使うチーム、寸劇をとりいれるチームなど、発表時間3分間を使って工夫をこらしたプレゼンが行われました。参加者からは、「企業の方にプレゼンテーションの方法を教えて頂いたのは初めてで、非常に勉強になった」「自分たちの発表に欠けているものや課題がわかった」などの感想が聞かれました。和やかな雰囲気の中でも、参加者の姿勢は終始真剣そのもの。本日の講習会で得たスキルが、秋学期成果報告会でどう発揮されるか、山田部会長の「君はこの講習会で何を学んだのか?」の問いの成果が期待される講習会となりました。



## ◆2013年1月7日(月) 2012年度プロジェクト科目秋学期学生懇談会 ◆2013年1月9日(水) 2012年度プロジェクト科目秋学期SA・TA協議会 ◆2013年3月2日(土) 2012年度プロジェクト科目秋学期科目担当者・代表者懇談会

プロジェクト活動も佳境を迎えた1月初旬、山田部会長を囲んで秋学期の学生懇談会およびSA・TA協議会が行われました。学生懇談会では、各科目より受講生の代表が一同に会し、プロジェクト科目の活動を通じて得たことなどの振り返りが行われました。個々の持ち味を活かしながら、足りない部分をフォローしあうことにより、チームワークが身についたという意見には多くの受講生が共感しつつも、プロジェクトをすすめる上で、ただ同調し仲良くするだけではなく、相互に批判的な意見を出しながらのぎを削ることで、より質の高い成果に繋がるということを活動を通して理解している様子が伺えました。翌週に行われたSA・TA協議会では、「科目担当者」「科目代表者」「受講生」のそれぞれの関係を俯瞰できるSA・TAの立場から意見交換が行われました。中立的な立場でそれぞれを冷静に評価する視点を持ち、さらに気づいた点をどのようにプロジェクトメンバーに働きかけていくのかについて、白熱した議論が繰り広げられました。3月には科目担当者・代表者懇談会が開催され、秋学期の振り返りが行われる予定となっています。



## ◆2013年1月20日(日) 2012年度プロジェクト科目秋学期成果報告会

本年度も秋学期科目および春学期・秋学期連結科目全20科目が今出川校地に一同に集い、明徳館21番教室において、秋学期成果報告会が開催されました。春学期は各ブースにわかれたポスターセッション形式でしたが、秋学期は大教室の壇上でのプレゼンテーションで、活動の成果や学んだ成果が発表されました。また、初の試みとしてプロジェクト科目スチューデントアシスタント(学部生)が司会を務めることにより、これまで以上に学生主体の報告会となり、例年以上に会場の受講生が積極的に質問をする姿が見られました。発表者も質問の主旨を理解して的確に回答しており、PBL型学習を通して相互評価・自己評価の両方の力がつきつあるように思われます。楽器の生演奏や、寸劇など各プロジェクトの特徴を活かしつつも、パフォーマンスに終始することなく決められた時間内に伝えたいことがまとめられており、審査員からもレベルの高い報告会であったとの声が多数聞かれた反面、イベントや冊子等成果物を作成する為の作業自体が目的となった報告が続く、テーマや課題への掘り下げや、目指しているものについて伝わりきれなかったのご指摘もありました。受講生にとってはプロジェクトに対する客観的評価を受ける学びの機会となった報告会でした。ベストプレゼンテーションの投票は、各プロジェクト及び審査員による投票と受講生間の相互評価によって行われました。各賞を受賞された皆さん、おめでとうございます。

- 最優秀賞:「音楽は心の薬」-高齢者に音楽環境を整える-ラジオを活用して  
〈春・秋連結科目〉
- 優秀賞:京の台所・錦市場を中心に「京の食文化」を留学生に発信しよう!  
〈春・秋連結科目〉
- CNS賞(特別賞):梅田スカイビル(空中庭園・飲食店街他)魅力アップ提案  
〈春・秋連結科目〉  
京都伝統地場産業のイノベーションとキャリア発達を探る  
〈春・秋連結科目〉



## PBL教育フォーラム2012 2012年11月3日(土)

今出川校地新町キャンパス臨光館において、PBL推進支援センター主催・株式会社SIGEL共催によるPBL教育フォーラム2012「チームの学びを引き出すPBL~チームが個人を伸ばすのか、個人がチームを伸ばすのか?!~」が開催され、大学関係者を中心に150名近い参加者にお集まりいただきました。第1部では2012年度プロジェクト科目春学期成果報告会CNS賞受賞プロジェクトの学生より、プロジェクト科目におけるCNS活用事例の報告がなされました。第2部は、PBL型授業に取組む、多摩美術大学PBL科目、東京電機大学情報環境学部、専修大学ネットワーク情報学部、同志社大学プロジェクト科目の各大学学部・科目の学生による取組報告が行われました。第3部では、各大学1名の学生代表によるパネルディスカッションが行われ、本フォーラムのメインテーマについて議論が深められました。課題発見・解決の過程を経て繰り返される葛藤の中で、チームが学びの集団として深化し、またその変化をしていくのは他でもない個人であることを改めて認識する結果となりました。取組背景は違っても学生たちが本音で議論する姿に、会場からは多くの共感を呼び、盛会のうちにフォーラムは終了しました。

